三内丸山遺跡（青森市）の保存決定は約25年前の1994年。相次ぐ新発見に端を発する「縄文ブーム」を知らない世代は増え、「北海道・北東北の縄文遺跡群」に関わる人材の育成は各地で課題になっている。一方、縄文遺跡群の魅力を知り、地域のために活かしたいと考える若者も出てきている。

三内丸山遺跡内をガイドして歩く佐々木さん＝昨年11月

愛される遺跡に

三内丸山応援隊　佐々木世奈さん(19)

青森公立大学1年の佐々木世奈さん(19)は、三内丸山遺跡（青森市）のボランティアガイドらでつくる「三内丸山応援隊」の、現時点の最年少メンバーだ。

ガイドに挑戦したのは、冒険家三浦雄一郎さん（青森市出身）の言葉がきっかけだった。東奥こども新聞の記者として三浦さんを取材し、「自然あふれる青森で遊ぶこと自体が冒険だった」との話を聞いて以来、佐々木さんも市内の名所を訪ね歩く、独自の冒険に出るようになった。市子ども会議に参加して、地域活性化策の提案もした。たどり着いたのが三内丸山遺跡。ガイドについて何度も遺跡内を回るうち、興味と愛着を深めていった。大学進学を機に応援隊の研修を受講し、2020年6月に初舞台を踏んだ。

5カ月後の11月下旬には観光客約20人に三内丸山を案内した。1人で約50分間、手作りの資料を使いながら見どころを紹介し、「世界遺産登録を目指しています。応援よろしくお願いします」と呼び掛けた。観光客から自然と拍手が起きた。関東地方から来た女性(27)は「聞いていて縄文を好きなのが伝わってきた」という。

佐々木さんがガイドを目指したのは、観光客に関わり、地域活性化について学びたいと思ったのが理由の一つ。ただ、観光客が増えることだけが活性化ではないと考えている。「地元の人が、地元の魅力に気づくことが一番大切。世界遺産登録をきっかけに、世界の人に大事にされて、地元の人に愛される遺跡になってほしい」